

ふるさと御所 文化財探訪

其の十

弥生時代〈6〉

道具③

石器と鉄器

生涯学習課文化財係
☎内線696

弥生文化は朝鮮半島からの渡来人により、紀元前8世紀ごろまでに北部九州地方にもたらされ、当初から水稲農耕技術とそれに伴う各種道具が概ね揃っていました。つまり、日本列島には青銅器時代と鉄器時代がほぼ同時にやって来た、ということになります。

ただ、日本海を介して朝鮮半島に門戸を開かれ、鉄器の入手が可能であった北部九州や山陰地方以外では鉄器の普及は大幅に遅れ、利器の素材としてはまだまだ長く石器に依存することになります。

鴨都波遺跡出土の石器を例にとると、石包丁（写真1…幅12・8cm）は稲の穂を摘み取るための道具です。当時の稲は生育の度合いにばらつきがあった

ために、鎌で根刈りするのはかえって非効率だったようで、穂摘具の使用が一般的です。石包丁や石鋸（矢尻）など一般的な石器は鴨都波遺跡の集落内において製作されたものとみられますが、それは少し性格を異にする石器もあります。



写真1 石包丁（緑泥片岩製）

まれにみられる石鎌（写真2…刃長10・6cm）は、石器とは思えぬほどの美しい形状をしているのみならず、細部の調整も非常に細やかです。この細部調整は、荒割りした石器素材に鹿の角の先などを押し当てて少しずつ剥離させるものですが、現代のわたしたちからすれば、必要以上に凝った造りといえます。同様に、石剣（写真3…長さ18・9cm）もまた、大変凝った造りといえるでしょう。

このような必要以上とも思える凝りは、これらの石器が交換財として流通していたことを示すと共に、その製作

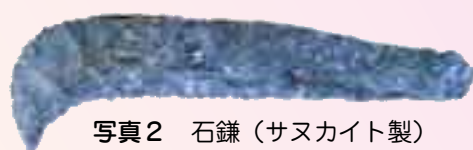


写真2 石鎌（サヌカイト製）



写真3 石剣（サヌカイト製）

写真4 各種の石斧（石材は各種）



を専業とする集団が生まれていたことを示します。同様の性格を有する石器として、各種の磨製石斧（写真4）も掲げておきましょう。

前記のようなやや特殊な発達を遂げる近畿地方における弥生時代の石器文化ですが、後期（2世紀ごろ）に入ると、消耗率の高い石鋸（矢尻）を除き石器はみられなくなり、近畿地方にも鉄器が普及します。

これは弥生時代後期に至って、近畿地方の各拠点集落が、瀬戸内ルートによる朝鮮半島からの鉄の舶載（北輸入）システムを確立させたことを示すものであり、この動きは続く古墳時代において、近畿の勢力がリーダーシップを取るための胎動となるものと評価できます。

コミュニティバス「ひまわり号」運休します

◆運休期間 3月23日(月)～25日(水)

(西コース・東コースとも運休します)

いつも「ひまわり号」をご利用いただきありがとうございます。
「ひまわり号」は、車検（継続検査）実施のため上記の期間運休します。
ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

管財課☎内線234

